Oshima
Letter

# 大島レター

# 3

December
2017

# 目　次


＜ごあいさつ＞
園長に就任して　岡野美子（国立療養所大島青松園　園長）　2

＜最近の活動紹介＞
劇団桃唄309による演劇『風が吹いた、帰ろう』がありました　3

＜連載コーナー＞
瀬戸内放送局　今月の「大島アワー」　5

＜大島の連絡帖＞
大島ジオラマづくり始動！　6

編集後記

# 園長に就任して

岡野美子　Okano Yoshiko（国立療養所大島青松園　園長）

平成29年10月1日付で国立療養所大島青松園の園長を拝命いたしました岡野美子です。平成11年から岡山県にあるハンセン病療養所の国立療養所邑久光明園で眼科医として勤務し、昨年4月にここ大島青松園の副園長となり今に至ります。

前の勤務地の邑久光明園も長島という島にありますが、長島大橋でつながっていますので島であることを意識することはありませんでした。しかし、大島では、通勤もですが、何かと船便を気にする生活です。島の美しさと島であることの不便さ、そして多くの悲しみがここにあったことを感じる日々です。

現在入所者は57名となりました。職員一同と協力して、入所者の皆様の尊厳ある人生が豊かなものとなるように医療・看護・介護・生活をお支えしたいと思います。

今年の5月19日第13回ハンセン病市民学会が大島で開催され、多くの来園者がありました。大島青松園の応援者がたくさんおられることを知り、大変頼もしくうれしく思いました。瀬戸内国際芸術祭２０１９の開催も楽しみにしています。親しくお交わりさせていただきたいと思いますので、気軽にお声をかけてください。また、社会交流会館の展示物を準備中ですので、フルオープンの際にはぜひお越しください。

将来構想など取り組まなければならない困難な課題がありますが、隔離の島ではなく、地域の中の大島としてのあり方を考えていきたいと思います。よろしくお願い申し上げます。

# 劇団桃唄３０９による演劇『風が吹いた、帰ろう』がありました

写真：逢阪憲吾

９月23日、24日、劇団桃唄３０９による『風が吹いた、帰ろう』（主催：瀬戸内国際芸術祭実行委員会）が、サンポート高松で上演されました。内容は、若くして大島に隔離された一人の女性を巡る群像劇（主人公中心ではなく多人数でストーリー展開する劇）。年老いて島で亡くなった彼女の生涯に、現代を生きるさまざまな人たちが出会い、たどる中で、自らの運命も変わっていくというフィクション（架空のお話）です。ハンセン病の話というよりは「ハンセン病とどう向き合っていくか」というメッセージが印象的でした。

そもそも、このお芝居は、２０１４年のラジオ番組「ちょっとこま大島」をつくるワークショップ（高松市主催）がきっかけでした。その講師として、劇団桃唄３０９の代表　長谷基弘さんが大島にやってきて、番組づくりのために、入所者のみなさんからさまざまな声を集めました。厳しい時代の話、趣味やクラブ活動の話、今の楽しみなど一人ひとりからいろいろなお話を聞くことができました。長谷さんは、入所者の方の

写真：伊藤馨

話を聞いて楽しいと感じたと同時に、ここで生きてきた人たちのことを劇にして伝えたいと思ったそうです。長谷さんの強い想いは現実となり、２０１６年は東京で、今年は高松で上演しました。また、お客さんに大島やハンセン病のことを知ってもらおうと、会場ロビーでは、昭和初期の大島の古い写真やハンセン病の紹介パネル、芸術祭や高松市、こえび隊の取り組みも合わせて展示しました。24日には入所者の方も鑑賞し、「ストーリーは複雑だが元気をもらった」と言っていただきました。

公演翌日は、「入所者の方と交流がしたい！大島を訪れてみたい！」という劇団員の希望により大島へ。納骨堂や風の舞を訪れた劇団員は、ここで暮らし亡くなった人たちに想いを馳せていました。大島から見る風景、大島の空や植物、浜辺、そして美しい瀬戸内海にも感動していました。その後は、カフェ・シヨルで入所者のみなさんを招いて交流会を開催しました。

２０１４年の一度きりの「ラジオ番組づくり」をきっかけに、3年経った今、またこうしていろんな方々と大島が繋がりはじめています。

＜連載コーナー＞

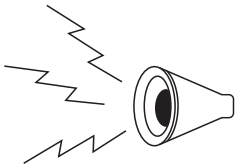
# 瀬戸内放送局　今月の「大島アワー」

園内限定で放送しているラジオ番組が始まって2年が経ちました。毎年開催している大島サマーキャンプに参加した子どもたちの元気な声や、大島に関わるアーティストや他の島の方の声も集めて賑やかに放送しています。毎月1回、目の不自由な方や外を出歩くことが困難な方にも部屋でくつろぎながら聞いていただき、日々の生活に約15分間の小さな楽しみを届けられたらと思っています。

さて、今回は入所者の趣味のお話のコーナーから、磯野常二さんの川柳のお話です。

大島で川柳をしていた人は、昭和10年頃から「藻汐草」に投稿していたと聞いておる。戦争中は一時中断しておったけど、戦後に「青松」が復活して、そのときにひさご川柳や俳句会などができたんよ。その後、盲人会は正式に作業人がついてくれて「灯台川柳会」ができた。発足当時は、20人もおったんよ。盲人会の会員は90人もおったからね。

残念ながら今は「灯台川柳会」はなくなってしもうたけど、「青松」に川柳を投稿しております。私にとって川柳のいいところは、どこででも考えることができて川柳にできるところだと思います。時間潰しにもなるし、自分の日記がわりにして川柳をしております。



**磯野さんの一句**

**島々の　雪の化粧が　眩しくて**

ご自身の目が弱視になっても、瀬戸内海の多島海に雪が積もると光で反射しているのがわかるのだそう。雪によって化粧された美しい島々の様子を句にしたそうです。

# 大島ジオラマづくり始動！

2018年4月にフルオープンする「社会交流会館」の展示室のひとつに、大島のジオラマを設置することになりました。これは、入所者自治会の希望によるものです。建築家や鉄道ジオラマのプロの協力の元、こえび隊が制作を手伝うことになりました。昭和30年代前半、多くの入所者が住んでいた時代のジオラマです。厳しく大変な時代を仲間とともに助け合いながら生きていた入所者の生活の様子を再現し、みなさんの想いと歴史を後世に語り継ぐために、150分の1サイズ、長さ約6メートル、横幅約4.5メートルのジオラマをつくります。ジオラマでは約1センチの人々が歩いたり、作業をしたり、野球をしたり…。みなさんも、ぜひ制作にご協力ください！

昭和30年代の写真を見ながら打ち合わせをする
入所者自治会のみなさんと建築家と鉄道ジオラマのプロ

## 「大島のジオラマをつくろう！ワークショップ」

ジオラマではより実際に近い風景を作るために、入所者から昭和30年代当時のお話を聞くワークショップを開催します。みなさんが「どこで・どのような」生活をしていた？建物の壁の色は？井戸の場所は？海辺の思い出は？など詳細な情景についてお聞きし、記録していきます。これらを元にジオラマの風景を作ります。

日　程●2018年2月10日(土)、11日(日)
行き11時15分高松発 ／ 帰り16時30分 大島発
対　象●小学5、6年生以上
参加費●500円(ワークショップ費、保険料含む)
定　員●各日10名程度

お申し込み方法や詳細については瀬戸内こえびネットワークまで
TEL 087-813-1741　info@koebi.jp

## 編集後記

3号の表紙は印象的な「松」。どっしりと太く大きな幹にくねくねと曲がった枝。遥か昔から大島にあり、その存在感に圧倒されます。

先日、いつものように大島の港に着いて桟橋からてくてくと門の方へ歩いていました。ところが、防波堤の手前までたどり着くと、いつもと違い空が広く感じました。地面を見ると切り株を発見し、その瞬間、松がなくなったことを理解しました。同時に、松が一本なくなると風景もガラリと変わることに驚きました。入所者のみなさんからは「昔は日中でも暗いくらい松がたくさんあった」とよく耳にします。せめて今ある松は残って欲しい！その想いも込めた表紙の松です。

大島レター　3　　2017年12月10日　　発行　高松市
編集協力　国立療養所大島青松園、大島青松園入所者自治会
編　　集　こえび隊（笹川尚子、甘利彩子、北川フラム）
問い合わせ　NPO法人瀬戸内こえびネットワーク　〒760-0019 香川県高松市サンポート1-1
TEL087-813-1741　FAX087-813-1742　info@koebi.jp　www.koebi.jp